

## 4. みたらしだんご

各務原市立蘇原第二小学校6年

武田 紗輔 加藤 紫都香 弓岡 美咲

↓

敦賀市立敦賀南小学校6年

岸本 祐歩

「おじいちゃん……、おじいちゃんっ！」

今日は、十二月二十四日。

楽しい楽しいクリスマス・イブ……のはずが、大切な宝物を失った日となってしまった。

ぼくの大切な宝物、それは勇造おじいちゃんだ。

勇造おじいちゃんは、ぼくのことをとってもかわいがってくれた。よく二人で公園に行き虫をつかまえたり、のら猫を追いかけてまわしたりしたっけ……。

ぼくに『勇気』という名前をつけてくれたのも、おじいちゃんだったんだ。

大好きだったおじいちゃんが死んだ……。そんなこと信じたくない。だけど涙があふれてくるってことは、やっぱり本当なんだよね。

「あれ？ 勇気、どうしたの？」

あっ、いとこのみっちくん。ぼくは人前で涙なんてみせたくない。簡単に言うと強がりなんだ。

ぼくは、表へかけ出した。だれもいないことを確認するとぼくは、思いっきり泣いた。泣いて泣いて泣きまくったぼくは、泣きつかれてその場にすわりこんだ。

その時だ。

サッ

家の中から白い物が飛び出してきた。

よく見ると、それは白いきつねだった。

「あれ？ 何かくわえてる。あっ、もしかして……」

きつねがくわえていたのは……だんご。

甘いたれがかかったみたらしだんごだった。

ぼくはきつねのことを許せないと思った。

何でかって？ それは、そのみたらしだんごがおじいちゃんへのおそなえ物だから、それに、みたらしだんごはおじいちゃんの大好物だった。学校から帰るといつもおじいちゃんが、

「ああ、勇気か、お帰り。だんご食うか？」

って、むかえてくれたんだ。

それに、いやなことがあっても、おじいちゃんがくれるだんごを食べると元気が出る。

だから、きつねがだんごを持って行ってしまった時は、おじいちゃんとの思い出を持って行かれた気がして無性に腹が立った。

だからぼくは、きつねを追いかけてみようとした。というより、もう追いかけていた。な

ぜか足が勝手に動いていたんだ。

「まっ、待ってよ。だんご返せよ」

ぼくは必死になった。

泣きながらきつねを追った。

泣いているところを人に見られるわけにはいかないなんて、強がっている場合じゃなかった。ただ、だんごを取り返すことで頭がいっぱいだった。

息が苦しくなった。心臓が口からとびだしそう。

それでも夢中で走った。だから、どんどん知らない道へと迷いこんでいるなんて気が付かなかったんだ。

「待って……待ってよっ」

きつねを追いかけているうちに、見たことのない公園へ来ていた。

「こどここ？」

遊具なんて一つもない、木ばかりの公園。

なんとなく暗いふんいきだ。

「きつねは……？ あっ、いたっ」

ぼくは、見失わないように一生けん命にまた走り出した。

あんまり走りすぎて足がもつれた。その時、

バッチャーン

きつねは、水たまりにとびこんだ。

「えっ！ うそっ？」

きつねの姿がとつ然目の前から消えたのだ。

あたりをよーく見回すとなんと、きつねが水たまりにうつるにじの上を歩いている。

ぼくはみたらしだんごを取り返すため、夢中で水たまりの中にとびこんだ。

バッシャーン

目をあけたしゅん間、ぼくの目には、見たこともない世界が広がっていた。

そこは一面緑の世界。山か森か林か、よく分かんないけど、ところどころカラフルな色の花がさいて、とってもきれい。

風がそよそよふいている。

少し前まで居た世界とはまったくちがう世界に来てしまったみたいだ。自然がいっぱいでぼくは、この世界がちょっと気に入った。

「こどここなんだろう。でもなかなかいいじゃん」

いっしゅん我をわすれかけたぼくだけど、木と木の間をかけぬけるきつねの姿を見て、だんごを取り返すという目的を思い出した。

ぼくは、きつねを追いかけて始めた。

「まって！ みたらしだんご返してよ。ぼくとおじいちゃんの大切な、大切なだんご」

その時、きつねが走って行った方が光った。

「ま、まぶしー」

光がきえた時、ぼくは、目を開けた。

「あっ、きつねを追いかけないと」

だが、きつねの姿はもうどこにもなかった。

「どうしよう。きつねがいない。ん……だれがいる。だれだろー？」

ふしぎのオーラがただよう、長いかみを二つむすびにした女の子。歳はぼくと同じくらいだった。

ぼくはその女の子に近づいてみた。

その子はぼくの気配に気がつき、こっちをむいた。

おもいきってぼくは、

「あの……、だんごをくわえたきつねを見なかった？」

だが女の子は何も答えてくれない。

「ねえ……、してるの？ しらないの？」

女の子は、だまっただままで答えてくれない。

その時、いきなり女の子が走り出した。

「ちょっ、ちょっと！ どこ行くの？ ねえ、ねえってば！」

女の子は、ぼくの問いかけには一言も答えてくれなかった。

ぼくは、走る女の子を追いかけた。

その子は、思ったより足が速かった。

いきなり女の子が草やぶにとびこんだ。

バッ

今度は、草やぶから、きつねがいきおいよく飛び出してきた。

「な、なんで……？」

きつねの口にはまだだんごがあった。

おじいちゃんがいつもくれた思い出のみたらしだんごは、まっ白になりすっかり変わりはてていた。

そのみたらしだんごを見たとき、涙がポロポロこぼれる。

涙をうでで強くふく。何があってもだんごを取りかえそうと心に決めたぼくは、またきつねを追いかけ始めた。

やさしくて強いおじいちゃんのために……。

ぼくの足は、けがだらけ。

追いかけるのをもうやめようかとも思った。けどおじいちゃんのことを思うと、気持ちとは反対に足が勝手に動く。

まわりのけしきが、とってもきれい。たんぽぽが咲きみだれ、風がス～とふいている。でもぼくは気にもしなかった。前だけを見て走る。

いつの間にか、夜になっていた。

ぼくは、道のはしにすわりこんだ。

急に悲しみがこみあげてきた。

悲しくて、悲しくて、たえきれなくなって、

「おじーちゃんーん」

大声をだした。

「……あれ？ おじいちゃんの声がする」

ぼくの心には、勇造おじいちゃんの声が、その時確かに聞こえた。

「勇気を出して進むのじゃ」

ぼくは、その一言でまた勇気がわいてきた。

きつねだけを見て走った。つまずこうと、はちの大群におそわれようと、まっすぐに走り続けた。

「きつね、待て――。だんご返せ――」

その声には、勇気があった

「あっ」

ぼくは立ち止まった。

そこはがけだった。下は真っ暗で何も見えない。

きつねはなんなくとびこえ、ぼくをみつめた。

「もうだめだ」

もうあきらめようと思ったけど、おじいちゃんのことを思うと、もどることができない。ぼくは死ぬのをかくごして、目をつぶった。

「一、二、三！」

ピョーン！

あと少しでむこう側に届きそうだったけど、

「わぁー」

ぼくはすごいスピードで下へおちていった。

「おじいちゃんごめん、おじいちゃんごめん……」

ぼくは、自分が死ぬかもしれないのに、おじいちゃんのことを思いつづけた。

ポアー

と、下から光がさした。

「あー、死んだのかなー」

「えっ、おじいちゃん……？」☆

「おじいちゃん！」

それは、確かにおじいちゃんだった。

ぼくはすぐにおじいちゃんにだきついた。

いつの間にか、涙があふれていた。

おじいちゃんに夢中でしがみつく。

ぼくは声をあげてわんわん泣いた。さっき泣いたはずなのに、涙が止まらない。

「痛い……」

おじいちゃんは、ぼくをしめつけるようにしてだきついてくる。

その力はますます強くなってゆく。

ぼくは我に返り、おじいちゃんを再び見つめた。おじいちゃんがおそろしい顔になってぼくをしめつける。

「痛い……痛いよ……。おじいちゃんやめて！」

ぼくは必死になってさげんだ。

その時、どこからかおじいちゃんの声がした。

「そいつはにせものじゃ。わしではない」

ぼくはその時、そうだ、おじいちゃんがそんなことするわけない、と思った。

必死にもがいておじいちゃんをかんだ。

おじいちゃんは苦しそうだった。でもこれはにせもの。そう自分に言い聞かせた。

そしていきなり、にせおじいちゃんがボン！という音とともに葉っぱになった。

「葉っぱ？ 葉……きつね？ そうだ、みたらし団子を取り返さなきゃ」

でも、その時にはきつねの姿はどこにもなかった。

ぼくはぼうぜんとしていた。下を見ると石ころばかり。

「あれっ？」

そこには黒いものがあった。

そう、きつねの足あとだったのだ。

ぼくは必死でその足あとをたどった。

どんどんたどっていくと、その足あとは森へ続くようだった。

おそるおそる森へ入って足あとをたどっていく。足あとはまだまだ続いている。もっと進んで行くと、太い切り株の下まできていた。

その穴は、まるであのみたらし団子のような形だった。

「あの女の子だ！」

ふと上を見ると、あの女の子が立っていた。

手にはおじいちゃんのみたらし団子だ。

（えっ？）ぼくは思った。

きつねがぬすんだはずなのに、なんで女の子が持っているのだろう。そして、あの時のことを思い出した。草やぶに女の子が飛び込んだのに、なんで出てくるのはきつねなんだろう。

「もしかすると……。よし！ もう一回、ためしてみよう」

ぼくは思いっきり女の子に飛びかかった。

すると、ボンという音とともに、また女の子が葉っぱに変わった。

「やっぱり、思った通りだ」

葉っぱのそばには、あの団子どろぼうが立っていた。

そう、きつねだ。

きつねは、おじいちゃんのみたらし団子を切り株にはめた。

「何をしているんだ！ おじいちゃんのみたらし団子、返せよ！」

ぼくは大声でさげんだ。するときつねがやっと口を開いた。

「ごめんね。わたしの名前はコンコンって言うの。この団子は願いがかなう団子なの。どうしてもわたしのおじいちゃんを生き返らせてたくて……」

ぼくはおどろいた。

きつねがしゃべるなんて。それよりもっとおどろいたのは、この団子は願いがかなう団子ってということだ。

「ひどいよ……。ひどい。ぼくのおじいちゃんも死んじゃったんだよ。それなのに、なんで団子をとっちゃうんだよお」

ぼくの中から、いつの間にか涙があふれていた。

なんでぼくのおじいちゃんの団子で、コンコンのおじいちゃんを生き返らせなければいけないんだ？

ぼくだっておじいちゃんを生き返らせたい！

ぼくは、泣きながらも言葉を口に出さずおこっていた。

すると、願いを言おうとしているコンコンの前に、白い物が現れた。

「おじいちゃん……やった、願いがかなった」

うれしそうにしているコンコンに、コンコンのおじいちゃんがどなった。

「今すぐ団子を返しなさい。わたしはそこまでして生き返りたくはない」

「えっ？ おじいちゃん！」

「わたしはおまえの心の中にずっと生きている。だから見えなくてもそばにいるよ」

そして、コンコンのおじいちゃんは、にっこり笑ってすうっと消えていった。コンコンはあやまり、ぼくはコンコンを許し、ぼくとコンコンは友達になった。

「どうすれば帰れるの？ ぼく家に帰りたい」

ぼくはコンコンに聞いた。するとコンコンは、

「わたしのしっぽを持って三回ジャンプしてみて」

ぼくは、言われた通り三回ジャンプした。

気がつくやうに、団子を持ったまま目をつむっていた。どうやらねむっていたらしいのだ。改めておじいちゃんに団子をお供えすると、おじいちゃんの写真がウインクした。

おじいちゃんありがとう。

おじいちゃんは、ぼくの中にずっと生きているよね。

ぼくもウインクを返した。

すると、向こうからみっちくんの声がした。

「勇気一つ、遊ぼう」